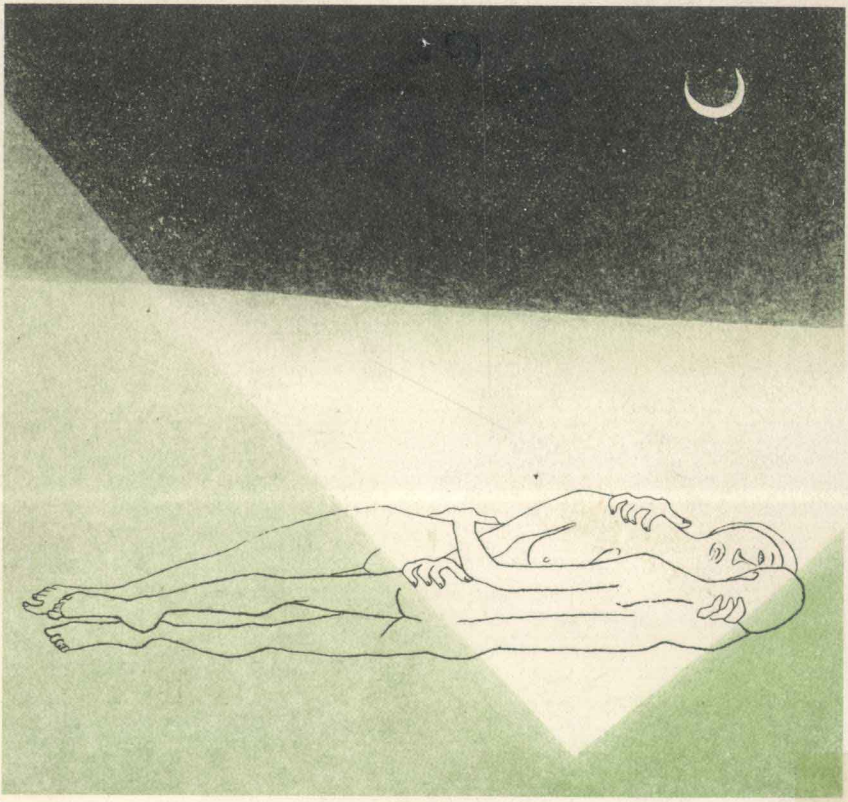
# 榧（かや）の木祭り

高城修三



新潮社版

# 榧(かや)の木祭り

高城修三

新潮社版

**著者略歴**

本名　若狭雅信。昭和22年，高松市生れ。高松高校をへて，京大文学部言語学科卒。出版社勤務ののち，現在，学習塾講師。「榧の木祭り」により昭和52年，新潮新人賞，昭和53年1月，芥川賞受賞。


榧の木祭り

著　者　高城修三（たきしゅうぞう）

昭和五十三年一月二十五日印刷

昭和五十三年一月　三十　日発行

発行者　佐藤亮一

印刷所　東洋印刷株式会社　製本所　新宿加藤製本

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電　話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定　価　九〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。


© Shûzô Takı Printed in Japan. 1978

目次

鏡の栖……5
榧の木祭り……87

装画·浜田知明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 榧（かや）の木祭り

# 鏡の栖す

時間の匂ってきそうな薄暗い駅舎を抜けると、朝の白い光が足元で跳ねて、何気なく佇んだ正木の眼を刺した。焦点が合わない。軽い眩暈を覚えて思わず空を仰ぐと、そこは一瞬闇のようだったが、たちまち青い空となり、次いで秋の澄んだ色を取り戻した。どこまでも澄んだ空は視線をひどく不安がらせる。西の方から遠慮がちに延びているうろこ雲に辿り着いて、視線はようやく一息入れる。その下には、すっかり色づいた山並みがもつれあって丹波の方に拡がり、さらに手前は華やかに飾り立ててはいるが安っぽさの透けて見える地方都市の駅前風景が拡がっていた。いつも見馴れたそれらの一つ一つが、正木の老いた眼に妙に輪郭を際立たせ、朝の光の中で鮮やかだった。

駅前はバス・ターミナルを兼ねたコンクリート広場になっているが、くたびれた建物とけばけばしい色で怒鳴り立てるような看板に取り囲まれたそこでは、車体を広告で飾りつけてあたふたとやって来るバスも、時間のあやつり人形のようにそれに群がる乗客も、無益な浪費によって何かを耐えているように見える。その広場の角まで来たとき、ふと正木は、向いの歩道に坐り込んでいる男に気づいた。この夏の終りごろから時たま見かける浮浪者だった。腰の後ろには秋風が吹くころにどこからか拾ってきた毛布を据え、だらしなく伸ばした両脚の間に飯盒を挟んで、秋

の陽ざしを浴びながら無表情に煙草をふかせていた。道路越しに見つめている正木にも、怪訝そうに覗き込む高校生にも無関心だった。表情を呑み込んだような黒ずんだ顔から白い煙だけが時おり吐き出されるが、それは意欲のない魂のように秋の光の中に漂った。正木は焦点の定まらぬ眼で立ちつくしていた。あの男にとっては、明け方に芥箱から残飯をあさり、駅の吸殻入れを掻き回したら、それで生きていくための努力は終るのだろう。後は秋の日溜りの中で、こうやって日の暮れるのを待つだけなのだろう。法律も道徳律もそこでは意味がない……。

正木はふっと我に帰って、足元にもつれてくる白い光を蹴散らすように歩き始めたが、光に足をとられそうな、どことなく危うい歩調だった。道路沿いに流れる三メートルほどのどぶ川に架けられた小橋を渡ると、左手に塗装のゆるんだ鉄筋二階建のM拘置支所があり、それと余り広くもない中庭を挟んで、M区検、正しくは京都地方検察庁M支部M区検察庁の古びた鉄筋平家の建物がある。地方都市の区検としては普通の、小ぢんまりした庁舎だった。

正木が玄関のガラス扉を押し開けると、すぐ左にある受付の小さな窓口から山地道子が丸い顔を覗かせた。

「お早うございます」

「ああ、お早う。ところで笹原君は？」

道子は心持ち目を伏せて向いの洗面所を指さした。振り返ると、ドアが半開きになっていて、そこから笹原の背が見えた。ひげ剃りに夢中で正木の声には気づかなかったらしい。笹原は自分の事務机にひげ剃り用具を忍ばせていて、出勤してから洗面所でひげをあたることがよくあった。そんな時は、酒の匂いをさせていてもいなくても、昨夜は深酒しましてと、くったくのない言い訳をした。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

正木は黙って洗面所にはいると、鏡の中からシャボンだらけの顔を突き出している笹原の背後に立った。笹原は肩越しに覗いた老人の顔に気づいて、それが誰であるかを確かめるようにゆっくり鏡面に顔を近づけたが、ふと動きを止めたかと思うと、慌てて振り向いた。笹原の顔を鏡の中で追っていた正木は、向うを向いた顔が不意を衝くように目の前にあったので、ひどくどぎまぎしてしまい、

「ああ、いいよ、いいよ。続けてくれ」

咄嗟にそう言うと、何を言おうとしていたのかも忘れてしまった。シャボンにまみれた顎を突き出したまま二、三度首を折って、「すみません」と悪びれもせずに言うと、笹原はまた鏡を覗き込んだ。厚めの唇を無理にすぼめて、あたりのシャボンを手際よくすくっていく。青い剃り跡が拡がる。正木は笹原の怒り肩の向うにぼんやりそれを見つめていたが、ふと、笹原の右の口わきから一筋の鮮血が剃り跡を伝っているのに気づいた。

「おい、口の右わきから血が出てるぞ」

ひげ剃りに没頭していた笹原は虚を衝かれて鏡に見入った。そして反射的に、血の流れていない方の口わきを右手の甲で拭った。

「違う！　右だ、右だ！」

苛立たしそうに言ってから、正木はハッと気づいて、躰をねじるようにしながら、妙に甲高い声で言い直した。

「鏡の右だから、左だ。左の口わきだ」

正木の声の調子に気押されるようにして笹原が左の口わきを拭うと、血がシャボンの泡と混って耳の方に尾を曳いた。鏡の中で血を拭った笹原の右手を、あれは左手なんだ、ちょっとした錯

覚なんだ、と自分に言い聞かせていると、正木は躰がねじれてしまいそうな気がした。
「よくありますよ、こういうことは」
鏡面で困ったように笑うと、笹原はまた安全剃刀を当て始めた。再び滲み出してきた血には、もう注意を払おうともしなかった。正木は何か言いたかった。しかし、言葉が浮んで来ない。四角い鏡の中で笹原の手が淀みなく動く。笹原の顎や唇がつくり出す奇妙な恰好も、肩の向うからおどけたようにこちらを覗いている老いた顔も、それを見つめている正木自身とはまるで関係のない秩序の中にあるような気がした。
正木は唐突に尿意を覚えて、洗面所の奥にある便器の前に立った。萎びた性器を引っぱり出そうとしたとき、検事の辞令と共に受け取った秋霜烈日を象るバッジが衿先で光っているのに気づいて、何気なくそれに見入った。尿道を伝った小水が白い陶器の上で跳ねる。そこに、鏡を覗き込んでいる笹原の火男顔が浮んでくる。四十年近く前、実務修習に配置された地検で、停年の迫った指導検事が「盗っ人の隠語で、検事は鏡なんだぜ」と、ひどくもったいをつけながら取調べのコツを小出しにしていたのを不意に想い出す。正木はわけも分らず苛立った。
鏡の前で熱中している笹原の横で手を拭うと、
「後で私の部屋へ来てくれ」
喉にからみつくような声でそう言って、正木は足早に洗面所を出た。
達筆で「既決」「未決」と書いてある二つの白い箱と黒電話が載っているだけの大きな木製机に腰を掛けて、正木は上衣のポケットを探り、潰れた黄色い箱を取り出した。一本だけ残っていた煙草に火を点けて、大きな溜息をつくように白い煙を吐き出したとき、山地道子がはいって来た。道子は盆に乗せた茶を正木の横に置き、いつもの仕草でカーテンを引いたが、正木に頬笑み

かけるのを忘れている。
「あ、山地君、すまんが煙草を買って来てくれんか。いつものやつだ」
正木が苦笑する。
「いこいですね」
道子が笑顔をつくる。部屋を出ていく道子の後ろ姿を追いながら、あれはやっぱり山地道子だったか、と正木は思った。
昨夜正木は遅くまで区検に残り、今日の取調べに向けて、送検されてきた一件書類とこれまでに当った参考人の供述を突き合せてみたのだが、そこに記載された事実に喰い違いを見出すことはできなかった。事件には確かな目撃者がおり、被疑者は犯行を認めている。にもかかわらず、正木はいつものようには落ちつけなかった。それは事件の報告を受けたときからの気分だった。九時を過ぎたころ、めったに行かない盛り場へ気分直しに足を向けた。酒場の灯がちらほらする暗い通りにさしかかったとき、ふと正木は、若い男女が肩を組んで前方を歩いているのに気づいた。衿を立てた白いコートをはおっている男はすぐ笹原と分ったが、女が誰なのかは分らなかった。しかし正木は、何となく山地道子であるような気がして、夜道で仔猫のようにじゃれあっている二人に淡い嫉妬を覚えた。
正木は煙草をくわえたまま苦笑いして、何気なく、机の背後に掲げられた墨絵の額に視線を移した。隅に朱色の落款がある。M区検に着任して以来、何の興味も覚えなかった絵だが、凝視していると、その絵柄が妙に気になってくる。丹波山地と日本海に挾まれたM市に相応しく、驟雨に煙る丹波の山並みを写したようにも見えるし、波濤が砕ける日本海の岩礁を写したようにも見える。暈(ぼかし)の中に頑固な黒い塊りがうごめいている。それは岩のようにも山のようにも、そんなも

のとは全く違った何かのようにも見える。額縁の薄黄色い枠の中に潜んでいる、どうにも無視できないものに、正木は不思議な苛立ちをつのらせていった。
「どうもいかんな」
吐息のように呟いて明るい窓に目を移し、正木は激しく頭を振った。くわえ煙草の灰が落ちる。慌てて灰皿を探す。西と北に明いた窓の中間に置いてある応接セットのテーブルの上に灰皿を見つけて、そこへ短かくなった煙草を押しつけていると、笹原が黒鞄と白い自慢のコートを抱えて部屋にはいって来た。
「先ほどはどうも。昨夜はこっちへ帰るのが遅くなって、元気づけに一杯やったのが深酒になってしまいまして……」
その効果を余り信じてもいない言い訳をしながら、笹原は照れ笑いした。口元には小さく固まった血がこびりついている。笹原は白いカバーのかかったソファに腰を落ち着けると、鞄からおもむろに書類を取り出した。
「本条信子についての報告書です」
笹原の差し出した書類の束を受け取って、正木は素早くそれを繰ったが、聴取したままで清書もしていない乱雑な文字を、老眼鏡を取り出して読む気はしなかった。
「取調べまで余り時間もないのでねえ、要点を手短かに話してくれないか」
まだ一時間くらいはあるはずだと思いながら、
「たいした調べもできなかったんですが」
と言って、笹原は正木が繰っている書類に目を落した。正木が気短かそうに促す。
「最初の日は、御命令どおりまずS園に行き、本条信子の上司である菊地医師と藤本婦長から事

情聴取しました。それから一昨日は神戸、昨日は京都を回って、最後に光照寺にも寄ってみたんですが、そこでちょっとしたことが分ったんです。あそこの住職によるとですね、光照寺は役の小角も修業したと伝えられる古刹で、平安時代には真言道場が開かれ数十の坊が山上に軒を並べるほどだったそうですが、やがて明治になると現在の一坊を残すだけの、まあ、山寺になったわけですね。その坊跡に明治のころ山仕事の者が一家族住みついたんですが、それが戦時疎開で一時は七、八軒にも増えたそうです」

「それが本条信子と？」

正木が先を急がせるように口を挟んだ。この男には余分なことが多すぎると思った。

「ええ、初めはぼくも気に止めませんでしたが、戦後の二十二、三年ごろにはみんな山を降りて今は明治から住みついているあの一軒が残っているだけですと言って、寺のすぐ下に見える茅葺きの民家を住職が指さしたとき、もしやと思ったんです」

「本条信子が、その一軒家と関りを？」

「いや、疎開者の方です。と言っても、本条信子は昭和二十四年に本籍地になっている神戸で生れたんですが、君上山で懐胎していたのは、まず間違いありません」

「ほう……、君上山と本条信子がこんな形で結びつくとはね……」

頻りに頷いている正木を見て、笹原が身を乗り出した。

「ところがですね、もしやと思って住職に伺うと、何でも戦後しばらくして住職になられたとかで、どういう疎開者がいたかまでは前住職からも聞いていないと言うんですね。それで、筒井という下の一軒家を訪ねて七十近い爺さんに当ってみると、確かに本条という母子の疎開者がいたんです。子供は男の子で、山を降りるときには二つだったそうです」

「すると、その子は君上山で生れた？」
「そうです。そして山を降りるときには、本条信子の母親、つまり本条サヨは妊娠していたんです」
「山を降りたのはいつだ？」
「二十三年の秋の終りごろらしいです。お渡しした中に本条信子の戸籍謄本があるはずですが、それによると二人とも私生児で、確か兄の方は信子が生れた年に病死しています。兄の方はともかく、本条信子の父親は疎開者か麓の村の人間だと思いまして、その爺さんに何気なく訊いてみたところが、わからん、と無愛想に言うんですね。何でも、サヨは変った女だったようです」
「変った女？」
「ええ、要求されれば誰とでも寝たらしいですね。麓の若い衆などは米や野菜を持って夜になるとこっそり忍び込んでいたらしくて、あんな食料難の時ですから、母子は結構それで食いつないでいたらしいです。疎開者の間では、食い物がねたみの種ですからね、中にはあからさまにサヨにあてこする者もあったらしいですが、そんな時にも、山の神様のおかげですと言って、平然としていたようですね。頭にきた一人が、その腹の子も山の神様の子かと喰ってかかると、へえ、そのとおりでと、しゃあしゃあと応えたらしいですよ」
「なるほどね……。しかし、またどういうわけで、そんな山の中に疎開したのかね」
「戦争中のことでもあり、都会からの疎開者には下の村で何かと難しい人間関係があったようです。それで追い追い山に上って来たそうですが、中には爺さんに縁故のある人もいて、本条サヨはその人を頼って疎開したらしいですね」
「で、山を降りた後は？」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com